

# 学会ニュース

## 目次

・ 2017年度会費納入のお願い	.....1
・ 第39回大会について	.....1
・ 大会における託児所・ベビーシッターの利用について	..... 2
・ 【共通論題要旨説明】	
「コスモポリタニズムの歴史的文脈」 大石 和欣	.....2
「世界の複数性」 坂本 貴志	.....3
・ 【エッセー】	
「『エミール』初版をめぐって―手稿版、初版、校訂版の相補関係―」 飯田 賢穂	..... 5
・ 事務局より	..... 9

## 2017年度学会費納入のお願い

代表幹事 長尾 伸一

2017年4月より新たな会計年度となりました。払い込み用紙を同封いたしましたので、年会費の納入をお願い申し上げます。年々、会計状況が厳しくなっております。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

## 第39回大会について

今年度の第39回大会は2017年6月24日（土）、25日（日）の両日、立教大学で開かれる予定です。開催校責任者は坂本貴志会員です。

本大会では共通論題及びミニセッションが開催される予定です。1日目の共通論題は「コスモポリタニズムの歴史的文脈」で、コーディネーターは大石和欣幹事です。また2日目の共通論題は「複数世界論の18世紀」で、コーディネーターは坂本貴史幹事です。

大会の詳細は同封のプログラムをご覧ください。

ご出欠は同封の葉書でお知らせください。**5月26日（金）まで**にご返送ください。多くの会員の皆様ご参加下さいますよう、お願いいたします。

## 大会における託児所・ベビーシッターの利用について

当学会では、子育て中の会員も大会に参加しやすいように、会場にて託児所を準備いたします。会場の託児所の利用をご希望の方は大会出欠はがきにてご連絡ください。

なお、大会参加時に託児所・保育所・ベビーシッター等を利用される場合は、学会が保育費の半額を負担いたします。ご希望の方は、学会終了後領収書を事務局までお送りください。後日学会負担分をお振込みいたします。

※なお、大会開催場所には諸般の事情により、託児所を設置いたしません。紹介斡旋もいたしかねますので、この点ご了承くださいますよう、お願い申し上げます。



## 【第39回大会共通論題 趣旨説明(1)】

### 「コスモポリタニズムの歴史的文脈」

コーディネーター：大石 和欣（東京大学）

コスモポリタニズムについての研究が盛んになっている近年であるが、その要因の一つにグローバル化の拡大と混乱がある。経済の領域において、国境を超えた人間と物資の流動性が高まり、文化の相互浸透が促進される一方で、それに対する不満や軋轢も蓄積されてきた。ヨーロッパにおける移民・難民問題が過熱したところで起きたイギリス国民投票によるEU離脱決定、アメリカ合衆国においてメキシコ国境の壁を設けると宣言して誕生したトランプ政権誕生は、現代的な視点からのコスモポリタニズムに関わる問題を提示しているように思われる。

もちろん、一八世紀研究の立場から、こうした現代の問題をそのまま持ち込んで考えるのは錯誤を犯すことになる。表面的で画一的なグローバリズムという二一世紀的な概念は、一八世紀の啓蒙主義が提示した世界市民、人類愛の理念とは異質なものであるし、現代の移民・難民問題は、カントが『永久平和のために』で提示した自由な諸国家の連合というヴィジョンや外国人の「訪問の権利」を想起しつつも、両者を重ね合わせてしまうことでそれぞれの問題の本質は見えなくなってしまう。しかしながら、現在の問題が一八世紀における「世界市民」、コスモポリタニズムをめぐる錯綜した文脈を照射してくれることもたしかである。この共通論題においては、一八世紀において展開したコスモポリタニズムという概念を、北米およびヨーロッパを軸にした歴史的な文脈のなかで再検討を試みである。

「世界市民 (κοσμοπολίτης)」の理念は、シノペのディオゲネスが特定のポリスに属さないものとして自らを呼称した際に用いたとされるが、ロゴスの普遍性に従う自然法を重んじるストア派によって、理性的な人類を包括する政体というヴィジョンへと展開されていく。より複雑かつ広範囲に国家権力、政治、商業、思想が絡み合う一八世紀の文脈のなかでは、一元的に議論できない概念として再構築、再定義がはかられていく。

ディオゲネスとストア派の「世界市民」の理念は、『百科全書』（1754年）における“cosmopolite”の項目において、所属する国を持たない異邦人に対する偽装的形容としての世界市民の意味と、フェヌロンが標榜したとされる「人類愛」の美德という意味とに並行して提示される。しかし、世界市民のヴィジョンは一七世紀以降の商業・交易の発展によって促進されたことも事実である。一七一一年五月一九日付の『スペクテイター』誌において、ジョゼフ・アディソンが、王立取引所を舞台に多様な国籍・民族の人びとが交渉し、ロンドンでは多種多様なものが売られているのを目の当たりにして歓喜し、「世界市民」である意識を高らかに誇示するのは、文化混淆を許容し、助長する商業の発展が背景にあ

る。それは商業に基づく平和を希求する新たなコスモポリタニズムの理念をつくり出すと同時に、他方で植民地を含む海外覇権の伸長をもくろむ「帝国」同士の対抗意識と抗争をもたらす要因ともなる。スペイン継承戦争、七年戦争、アメリカ革命戦争、フランス革命戦争と続くなかで、愛国主義と人類愛との両立の可能性というストア派以来の課題は、政治的な議論の核の一つとして展開していく。そうした歴史的文脈のなかで、外交や地政学的な問題も含めながら、ヨーロッパにおける一八世紀のコスモポリタニズムの展開を位置づけてみたい。

(大石 和欣)

## 【第39回大会共通論題 趣旨説明(2)】

### 「世界の複数性」

コーディネーター：坂本 貴志（立教大学）

宇宙世界像の中で人間がどのように位置づけられるかという問題は、20世紀になるまでに忘れられるようになったテーマであるように思われる。地球上における我々の生活と社会の様々な問題と関心からは、地球外の現象と歴史は、専門家を除けば、知的関心の自然科学領域における拡がりを見せしめるための好事家の対象でしかなくなったようにさえ思われる。一方、その専門家集団の関心の中心は、宇宙の歴史を説明するための大まかなスケールを手にした現在、系外惑星の発見とそこにおける生命現象の痕跡を探ることに移行したとも言われる。地球外の知的生命の存在は、AIと並んで、人間とその知性の意味をより普遍的なレベルで考えるための材料となるであろうが、それゆえにこそ、宇宙世界の中の人間像の探究というテーマをあらためて考える意義は今日において決して小さくはない、と考えられる。

他の天体の住民のイメージは、遅くともピュタゴラス派以来考察されてきたが、このイメージが人間の自己理解にあたって、決定的な指標として働くようになったのは、ハンス・ブルーメンベルクが説明したように、ルネサンスの終わり、バロックの始まりの頃であった。その議論の核心は、地球中心のプトレマイオスの宇宙像を抱くか、太陽中心のコペルニクスの宇宙像を抱くか、という単に世界像をめぐるのではなく、むしろ他の天体の住民を思い描くこと、すなわち世界の複数性を前提とするか否かが、キリスト者にとっての躓きの石だった（ブルーメンベルク『コペルニクスの宇宙の生成』1975）。他の天体の住民の存在をそもそも認めるか、認めるとするならば、それは啓示宗教といかなる関係をもつのか、という問いは、バロックから啓蒙期にかけてのヨーロッパの知性にとって、避けて通ることのできないテーマであったのであり、またこれを視野に入れてのみ、首尾

一貫した世界観をそれぞれの立場で構築することができたと考えられる。18世紀の代表的知性は、他の天体の住民を、否定するにしろ肯定するにしろ、視野の外にはおかなかった。そうした当然の問題圏が、むしろ自明すぎる根本的な前提を抱えていたために、19世紀後半以後の各学問分野の確立以降20世紀に到るまでに、その決定的な意義も含めて、忘れ去られるに到った原因となったと考えられる。

18世紀の複数世界論は、神学との整合性を見る上で、さまざまなレパトリーの出現とそれぞれの理論における完成を一応は見たように思われる。これを概観するにあたってはマイケル・J・クロウ、長尾伸一氏の仕事が参考になる。この度の共通論題では、18世紀にいたるまでの流れを考慮しつつ、英語圏、フランス語圏、ドイツ語圏、中国、そして日本というそれぞれの視座から、複数世界論が思想と文化、文学におよぼしたインパクトの様相をさまざまに検討してみたい。その目的は、宇宙論を背景にした文化と思想の状況を、それがもったより普遍的な相において再構成した上で、その意義を考究し、合わせて、現代における人間と自然宇宙との関係を考えていく上でのひとつの示唆を得ることである。

(坂本貴志)

## 【エッセー】

### 『エミール』初版をめぐる

#### — 手稿版、初版、校訂版の相補関係 —

飯田賢穂（東京大学）

ジャン＝ジャック・ルソーの著『エミール』の正規初版本が昨年2016年に名古屋大学の所蔵となった。12月18日の研究会（公共知研究会、『百科全書』研究会共催）では、坂倉裕治氏（早稲田大学）が同初版本を認定するための指標となる様々な事柄について、先行研究の整理を通じて説明した。その過程で『エミール』の最終稿が1762年に活字化されるまでの経緯を、18世紀中葉のフランスにおける印刷、検閲、出版統制の仕組みなどの出版事情をめぐる多様な歴史事実が説明された。坂倉氏の報告の後に、隠岐さや香氏（名古屋大学）の司会のもとで飯田賢穂（東京大学）が先行報告に対するコメントのかたちで、最終稿に至までの『エミール』の執筆過程を説明した。

本稿では、まず坂倉氏の報告を概観し、次いで飯田のコメント内容に触れ、最後に、研究会の質疑応答の際に取り上げられた問題、すなわち手稿・正規初版・校訂版の三種類を相補的に用いることの有用性を指摘することとする。

ちなみに『エミール』という作品は、初版のみならず、三種類の肉筆原稿そして断片が現存しているので、作品内容の重要性もさることながら、手稿版・初版・校訂版の三種を相補的に用いる研究ができる希有な作品である。まずは同書のこのような特殊性に留意しておきたい。

#### 1. 報告「『エミール』の初版本認定指標」について

坂倉氏の報告は大きく二段階からなり、まず『エミール』の正規初版本ができるまでの非常に錯綜した歴史的経緯を一次資料を用いながら整理し、次いで初版本認定の指標を確認した後、海賊版の種類やその出版経緯を概観した。

正規初版本ができるまでの経緯は、印刷の遅延からその裏に陰謀があるのではないかというルソーの疑念が深まり錯乱状態になったこと、刊行以前から原稿（その写しか）がいくつかの出版元（正規版元デュシェーヌも含む！）をはじめとする第三者の手に渡って回覧されたため、1762年の段階で多数の海賊版が出回るなど、錯綜を極める。1762年という出版年を使って刊行された『エミール』の諸版本は坂倉氏によれば14系統19種類にも上る。なお正規初版本は次の三種類のみである。

A. デュシェーヌ (Nicolas-Bonaventure Duchesne) によってパリで印刷された8折判（ただし出版地表記はLa Hayeとなっており、版元もオランダのJean Néaulmeと表記されている）。

B. デュシェーヌによってパリで印刷された12折判（ただし出版地表記はAmsterdamとなっており、版元もJean Néaulmeと表記されている）。

C. ネオーム (Jean Néaulme) によってアムステルダムで印刷された8折判 (出版地の表記なし)

名古屋大学の蔵書は上記のB版とC版である (なおC版はすでに所蔵されていたものであるが、こうして二種類の正規初版が揃ったことにより、両版を並べてその内容および組版等を検討する機会が日本において増えたということは大変有難いことである)。坂倉氏は松波京子氏 (名古屋大学附属図書館研究開発室) とともに各ページの誤植、削除された原註、割付等の指標を確認して両版であると認定した (坂倉氏が挙げた参考文献のうち、特に重要な次の研究を挙げる。MCEACHERN, Jo-Ann E., *Bibliography of the Writings of J.-J. Rousseau to 1800: Émile, ou de l'éducation*, vol. 2, Oxford, Voltaire Foundation/Taylor Institution, 1989)。

正規初版本の特定とは、『エミール』という「テキスト」を研究する上で「基準となるテキスト」を設定することである (同書の場合、正規版が三種類あり、それぞれに註の有無に代表されるような相違があるので、基準の設定はより複雑になる)。この基準に照らして既存の校訂本や、ひいては手稿の分析、執筆過程の復元が可能となる。そのため、初版本の特定、現物へのアクセス環境の整備は研究上重要な問題となる。他方で、同書の版本研究は日本語によるものがなく、日本人初学者は錯綜する細かな事実関係の中を右往左往することになる。また、ルソー研究を超える視点に立つならば、『エミール』の版本問題は『社会契約論』のそれと並んで (あるいはそれ以上に) 18世紀中葉の綴字・印刷・製本・出版事情を物語る格好の研究対象でもある。坂倉氏が今回の報告をもとに日本における『エミール』版本研究への突破口を拓く論文を刊行されることを願ってやまない。

## 2. 『エミール』の手稿について

正規初版本はルソーの絶え間ない思索と執筆という二つの営為を活字化という仕方で中断させた結果できあがった作品である。無論、これら二つの営為は活字化された後もなお続いており、三種類の正規本の相違や12折判 (B版) にルソー本人がメモした欄外書込 (BGE Cc. 12参照) がそのことを示している。

これら三版へと至るまでの思索の展開を物語るのが同書の手稿である。刊行版に至るまでにルソーは様々な手稿を書いている。『エミール』全五巻全体を扱った肉筆原稿は三種類知られている。(1) 第一全体草稿と見なされている通称「ファーヴル手稿」(F手稿)、この草稿を書き直した(2) 通称「国民議会手稿」(B手稿)、そして印刷のために出版元デュシェーヌに送った(3) 清書版「コワンデ手稿」(C手稿) である (なおF、B、C手稿という略称はPeter D. Jimackの用法を踏襲している)。三種類の肉筆原稿がどのような歴史的経緯で成立したのかという問題は、1750年代後半から1762年にかけてルソーの思想の変遷をたどる上で考慮に入れるべきものである。特にF手稿からB手稿への改訂作業は『社会契約論』の執筆過程と重なっていると推測でき、両者のあいだを往復しながらルソーがその思想を深化させていったと考えられる (なお本稿ではmanuscritをすべて「手稿」で訳した。ルソー研究ではmanuscritを「草稿」と訳す習慣がある。例えば「ジュネーヴ草稿」などが

そうであるが、manuscritの中には前掲の「コワンデ手稿」のように出版元に送られた清書版も含まれるので、両者を訳し分けることはせずに「手稿」という訳語に統一した。ちなみに「ジュネーヴ手稿」も当初は清書版として執筆されたという説が有力になってきている）。

より具体的には、『社会契約論』の前身をなす清書原稿（その一部が「ジュネーヴ手稿」と通称される帳面として残っている）の大幅な改定作業と、F手稿からB手稿への改訂作業は同時並行して行われていたと考えられる。両者の改訂箇所の間接関係を検討することは、1762年以前におけるルソーの政治思想と道徳思想の結節点という研究対象を設定することにつながる。例えばB手稿第2巻には、『エミール』第2巻半ばで説明される「良心」の目覚めと「約束」・「信約」遵守の関係をめぐる政治思想史の観点からも重要な原註の前身となる断片が書かれている（BAN 1428, fol. 54 v）。この断片はF手稿にはないので、B手稿への改訂途中で書かれたものであることが分かる。この断片とほとんど並行して書かれたと考えられるのが『社会契約論』第2編第6章「法について」の第二段落の第一草稿であり（BGE Ms. fr. 225, fol. 63 v）、その後第4編第8章「市民宗教について」の第一草稿（Ms. fr. 225, fol. 46 v以下）が書き始められることになるのである（いずれもbrouillonであるが、残念ながらこの語の意味を正確に表せる日本語はない）。いわゆる生成研究の視点に立つと、ルソーの作品は無数の断片が堆積した「地層」（B・ベルナルディ）を俯瞰してみた地図のようなものであり、同じ年代に属する堆積層（断片）を作品（分野）横断的に検討する方法の重要性が出てくるのである。

F手稿がいつ頃書き始められ、いつ頃執筆が終了したのか、という問題は上記のような研究上の射程を持つ。このような文脈において、Jimackの『エミール』執筆過程に関する諸々の仮説を確認、検証しておくことが今日においても重要な意義を持つ（JIMACK, Peter D., *La Genèse et la rédaction de l'Émile de J.-Jacques Rousseau : Étude sur l'histoire de l'ouvrage jusqu'à sa parution*, SVEC 13, Genève, Institut et Musée Voltaire, 1960）。12月18日の研究会では、特にF手稿に関するJimackの仮説を検討する資料が配布された。

概略としては、(2) F手稿の執筆時期に関する仮説を検討して、次いで(2)同手稿の執筆終了時期に関する仮説を検討した。最後に(3) Jimackが説明していない重要な問題（『ロンドン・クロニクル』問題）について飯田の私見を紹介した。本報告では詳述できないが、この『ロンドン・クロニクル』問題はJimackのF手稿執筆終了時期に関する鉄壁の推測に小さな穴があることを示している。

### 3. 手稿版、初版、校訂版

思想研究の観点では、推敲の痕跡が残る手稿は作者の思考展開を研究する上で必要不可欠な資料である。『エミール』や『社会契約論』といった正規初版本が特定できる作品においては、この初版を基準テキストと設定することによって執筆過程（思考展開）をより正確に復元することができるのである。

ちなみに近年、手稿研究は高解像度の画像ファイル（jpg、png、tiff等）を使って行うこ



とが主流になってきた。日本にいながら、例えばルソーの肉筆原稿を所蔵機関から取り寄せ、分析することができるのである。だが、手稿とは、インクで書かれたテキスト以上のものであり、筆記用具の種類（インク、チャコール、ペン先等）、紙質、透かし（filigranes）、製本構造等の物質的な要素の総体である（紙については次の研究書を参照。（GAUDRIAULT, Raymond, *Filigranes et autres caractéristiques de papiers fabriqués en France aux XVII<sup>e</sup> et XVIII<sup>e</sup> siècles*, Paris, CNRS Éditions/J. Telford, 1995））。特にルソーの場合、いわゆる主著の手稿は帳面のかたちに綴じられて現存しているが、誰がどこまでの部分を製本したのかという問題はいまだに解決されていない。そのためには綴糸の種類なども検討する必要があるが、これは画像資料では不可能なことである。手稿研究においてはその「物質的な側面」（吉田城『「失われた時を求めて」草稿研究』、平凡社、1993、29頁以下）を看過することはできない。なおClassiques Garnier版新ルソー全集の編集員B・ベルナルディの談によれば、ルソーは時計職人時代に飾り文字の書き方、彫金など様々な技術を習得していたとのことで、様々なメモ書きを集めて一冊の帳面に綴じる作業も多くの場合ルソー本人が行っていたとのことである（その意味で、2012年にジュネーヴのPatek Philippe Museumで開催された特別展“Timepieces signed Rousseau”は示唆的な展示会であった）。また画像資料の問題点としては、撮影する際に生じる紙面の「たわみ」が挙げられる。これは行間の幅や、綴じ白部分に入り込む文字列を分析する際の障害となる。例えば、行間に書かれた単語を避けるようにして下行の文字列が書かれているか否かといった問題は画像資料だけでは判断しにくい。

最後に校訂版に関して研究会で取り上げられた論点を紹介して本稿を終えることとする。『エミール』の特にF手稿とB手稿に関する限り、既存の現代ルソー全集（Pléiade版、*Édition thématique du Tricentenaire*版）は、異読情報を簡略化しすぎており、あまり役に立たない。例えば、Pléiade版第4巻、ET版第7巻にはF手稿の校訂版が収録されているが、いずれも『エミール』第5巻に相当する草稿部分の9割が校訂されておらず、F手稿を研究する上で誤解を生み易いかたちになっている。またB手稿から完成稿へと改訂される際の異読情報も両版にはほとんど収録されていない。ET版は2012年のルソー生誕300周年に刊行されたが、その最新の校訂版であってもいくつかの作品に関してはむしろPléiade版の校訂の質から後退している。したがって古い校訂版であってもその重要度は依然として高く、必ず参照されるべきである。例えば、神学的バイアスが掛かりすぎているとしばしば批判されるマソンの『サヴォア助任司祭の信仰告白』の校訂版（1914年）は私見ではその質の高さにおいて超えることのできない霊峰である。

この問題は刊行の際に想定される読者層にも起因する。異読情報をどの程度、どのような仕方で提示するかは、想定される読者層をどこに定めるかで変わる。

かつてベルナルディが率いていたGroupe Jean-Jacques RousseauがJ. Vrin社から刊行した校訂（注解論文付き）は、「手稿研究の成果をより広い読者層に」という方針のもと、準再現型転写法（transcription sémi-diplomatique）の方法を採用している。私見では、こ

これは画期的な方策であり、『政治経済論』、『戦争法の諸原理』、『社会契約論』の三著作に関しては卒業論文のレベルから専門の研究者まで参照可能な形態になっている。注意点をひとつ挙げるとすれば、読者はベルナルディ監修の復元手稿を読むことになる点であろう。準再現型転写法は様々な記号を用いて執筆のプロセスを解釈そして復元する方法であるので、例えば欄外からの挿入の順番や位置に関しては監修者の解釈に依存することになる。完全再現型転写法を導入して復元した資料を付すことが望ましいが、その場合、特定の規格サイズでは文字が読めない等の書籍化にあたっての様々な問題が生じる。ルソーの手稿研究の成果をより広い読者に示すという方針を採るならば、**Groupe Jean-Jacques Rousseau**の方法が最適解のようにも見える。

印刷技術普及以降の思想研究では手稿版、初版、校訂版の三種はそれぞれ固有の役割を持つ。手稿は著者の思索展開の痕跡であり、これをたどることを通じて私たちはその著者が取り組んだ問題を言わば著者とともに考察することができるのである。初版は分析対象となるテキストの基準をなすものであり、テキスト分析に際してその内容や構造を踏まえておく必要がある。校訂本は校訂者たちの分析・解釈の結晶であり、多様な校訂者たちの取捨選択とその理由を検討することによって私たちは自身の解釈を深め補強することができるのである。12月18日の研究会では、思想研究における上記三種の相補的な関係が再確認されたと言える。



## 事務局より

### 会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため、身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき、会費納入にご協力をお願い致します。すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。事務局移転に伴い、郵便振替口座も変更となりました。今後は以下の振込口座へ会費の納入をお願いいたします。

<郵便口座振替で振り込む場合>

口座記号番号：00800-7-183350 口座名称：日本18世紀学会事務局

<銀行等から振り込みする場合>

銀行名：ゆうちょ銀行 店名：〇八九店（ゼロハチキュウテン）

預金種目：当座預金 口座番号：0183350

### 『年報』への論文投稿について

すでにご存じと思いますが、数年前から、大会での発表をもとにしたもの以外の論文も投稿できるようになりました。詳しくは『年報』末尾の投稿規程をご覧ください。

### 投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局までお申込み下さい。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。（経費等の都合上、枚数の少ないものに限りです。）

### 共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。（特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないと思われる方は、積極的にご推薦ください。）

### 学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は10月半ばまでに、4月号は2月初めまでに、9月号は7月半ば頃までにご希望をお寄せください。）

## 年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

## 寄付のお願い

前号以来、以下の方から寄付がありました。お礼申し上げます。

匿名希望	5口	5000円
匿名希望	10口	10,000円
計	15口	15,000円

また、寄付を希望される方は、別紙要領をご覧ください。

## 献本

アンジェリカ・グデン著、譲原晶子訳『演劇・絵画・弁論術 18世紀フランスにおけるパフォーマンスの理論と芸術』(2017年4月17日、筑波出版会)324頁

## 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され会費については次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

## 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

## メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、これまでメーリングリストより配信されていたにも関わらず最近メールが届かないという方、またご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：出羽尚、王寺賢太(国際幹事)、大石和欣(常任幹事)、隠岐さや香、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、小関武史(常任幹事、年報担当)、斉藤渉、坂本貴志(常任幹事、年報担当)、武田将明、玉田敦子(常任幹事)、寺田元一(東アジア交流担当)、長尾伸一(代表幹事)、馬場朗、逸見龍生(常任幹事、年報担当)

会計監査：安室可奈子、真部清孝

事務局委員：加藤里紗 松波京子 長谷川拓彌

日本18世紀学会ニュース 第84号 2017年4月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 長尾伸一

事務局 〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院経済学研究科 日本18世紀学会事務局

e-mail: [jsecs.nagoya.uni@gmail.com](mailto:jsecs.nagoya.uni@gmail.com)

tel: 052-789-2380

fax: 052-789-4924

<http://www.gakkai.ac/jsecs/>